

人間いろいろ、「心の教育」もいろいろ



PROFILE

伊藤 勢津子 (いとう せつこ)
 宮城県生まれ。小、中、高の教職経験後、臨床心理士となる。
 県立子ども医療福祉センター、山の手クリニック心理職を経て現在、長崎県立大学、国立佐世保高専、長崎労働局メンタルヘルス相談カウンセラー。

「ゆとり」と「笑顔」がキーワードズ

心理臨床を仕事として始めたばかりのころ、クライアントの心の痛みを早く治してあげたいとの気持ちに駆られ、気持ちばかり焦っていたことがある。治そう治そうと思えば思うほどクライアントの症状は悪化していくように思えて悲しかった。そんなとき、焦る気持ちを静めてくれる言葉に出会った。

- ・ To Cure Sometimes.
治すことはたまにしかできない。
- ・ To Relieve Often.
軽減することなら、しばしばできる。
- ・ To Comfort Always.
慰め励ますことは、いつでもできる。

私に関わる人たちの「心」の痛みを治すこと、教えることはできないが、一緒に考え、寄り添うことはできる！と思った途端、私の中にあった気負いが薄れ、気持ちが楽になった。私の心の中に「ゆとり」が生まれ、クライアントに「笑顔」が戻った。

「心の教育」って何だろう？

心理臨床という私の仕事は「心」には深いつながりのある仕事であるが、「教育」とは似て非なるものである。そこで、「教育」の専門家である教員の皆さんに「心の教育とは何か？」と尋ねてみた。群を抜いて「道徳

教育」との回答が多かった。そして、「命」「愛情」「思いやり」「優しさ」「^{しづ}静」「生徒指導」etc.の教育と続いた。総合すれば全人格教育のようなものなのだろうか？

最近、心理臨床のワークショップで教員の方々にお会いする機会が多くなった。学級経営、道徳の授業にグループ・エンカウンター、ストレス・マネジメント等の手法を取り入れている教員も増えているとの報告もあり、熱心さに感心するばかりである。しかし、授業の他に校務分掌、そしてクラブ活動指導と先生方の多忙な仕事ぶりを見るにつけ、心理臨床家としては、教師のメンタルヘルスの方が心配になっている。この上、学校が全人格教育まで担っていくことは教師への負担が重過ぎる。今、「ゆとり教育」の見直しが問題になっているが、「先生方に『ゆとり』を！」と思わずにいられない。

「心の教育」と大上段に構えずに、自分らしく、「ゆとり」と「笑顔」をもって、子どもたちと「心のふれあい」を実践している先生方のエピソードを紹介したい。

私は子どもが好きなんです！

中学3年生の学年主任A先生、昨年末に不登校生徒の家を一軒一軒担任の先生と訪問した。時間外の仕事なのでお疲れかな？と思ったがA先生からすてきな話をお聴きすることができた。

「登校するのは難しそうだったけど、学校で会えなかった生徒の顔を見て、皆元気で嬉しかった。帰宅途中に、大事なことを思い出しました。20年も教師をしていて、いつの間にか忘れかけていたのです。私は子どもが好きなのだ、教師という仕事に希望を抱いて、この仕事に就いたのだということをして！仕事がまた楽しくなってきました。」A先生の顔には疲労感はなく、きらり！と光る笑顔であった。

不登校生徒への家庭訪問はそう珍しいものではない。これを実践なさっている先生方は少なくない。私がすてきなと感じたのは、A先生が学校で会えない生徒に会えたという喜びを素直に感じているからである。家庭訪問に行ったけど、結局は学校に来ないじゃないか、ちっともしゃべってくれないじゃないかななどと、否定的に捉えていないところが素晴らしいと思う。

「心」というものは教えるものではなく「伝え合う」ものである。決して一方通行ではない。多くの言葉のやり取りがあったわけではないが、生徒たちはA先生に忘れていた教師魂を思い出させたのである。生徒たちにもA先生の「会えて嬉しかった」という気持ちが伝わったのではないだろうか。

心の教育

さっちゃんはさっちゃん!

伊藤 勢津子 さん
連載 第2回



〈さっちゃんは発達障害?〉

さっちゃん(仮称)は1年前、2歳半になっても言葉がほとんど出ないという主訴で父方の祖母と来院した。さっちゃんのお母さんは生後間もないさっちゃんを残して家を出てしまい、さっちゃんは1歳半までお父さんに育てられた。お母さんが出て行ってからお父さんの精神状態が悪くなっていき、さっちゃんは父方の祖父母に育てられることになった。言葉を発せず、笑顔がないさっちゃんを心配した祖母が地域の保健師さんに相談し、発達障害かもしれないということで来院につながった。

初めて会った頃のさっちゃんは、おばあちゃんの後ろに隠れて、もじもじして私と目を合わせようとしなかった。おばあちゃん手作りのワンピースが似合う小柄な可愛らしい女の子であった。私と目が合うとうつむいてしまう、ちょっと寂しげな表情が気になった。お人形遊び、ボール遊び、お砂場遊びetc. 最初は遊びもごちなかつたが、週1度1時間程、一緒に遊んでいるうちに、「やっぱり子どもだな。」と感心するほど遊びに夢中になっていった。3か月も過ぎる頃、言葉もどんどん出てくるようになり、よく笑うようになった。さっちゃんに笑顔が出てくると付き添ってくるおばあちゃんにも笑顔が増えていった。

あれから1年が過ぎ、一緒にブロックで遊んでいると、いつも「一緒に一緒に」と私に

くっついていたさっちゃんが「さっちゃんはさっちゃん」と言いながら、私から離れて一人でブロックを組み立て始めた。

さっちゃんの中にはっきりと自我が芽を出していた。私はさっちゃんと一緒にプレイセラピーの終了を感じて少し寂しくなった。

〈ひろし君はADHD?〉

小学2年生のひろし君(仮称)は、授業中に机を叩いたり、前に座っているお友達にちょっかいを出したりという問題行動が頻繁になり、担任の先生とお母さんに連れられて来院した。

担任の先生は、注意しても問題行動をやめないひろし君に困っていて、ADHD(注意欠陥/多動性障害)ではないか?との疑いを持っていた。

お母さんは、ひろし君が学校でいたずらばかりしているとの担任の先生からの話を聞いていたが、申し訳なさそうに「家ではそんなことないんですけど…」とひろし君のことを話し始めた。ひろし君には2歳下の妹がいて、生まれたときから心臓が弱く、入退院を繰り返している。1年前からお父さんが単身赴任で不在になり、妹の通院のため、ひろし君には留守番ばかりさせていた。自分の育児が間違っていたのかもしれないと涙を浮かべた。

別室で待っていてくれたひろし君と二人でボール遊びをしながら、「最近困ったことな

いかな?」と尋ねると、ひろし君は悲しそうな顔になり、「だって僕ばかり、僕ばかり…なんだよ。」と答えてくれた。お母さんの話やひろし君の表情からその後続く言葉は容易に連想できた。

ひろし君と彼の気が済むくらい一緒にボール遊びをした後、ゆっくり話をした。「我慢は心を大きくしていくお薬なんだよ。だけど、我慢し過ぎもお薬の飲み過ぎと同じだからね。」と話すひろし君は、「じゃ、僕の心、大きくなってのかな?やったー!」と嬉しそうに飛び跳ねて、笑った。

担任の先生にひろし君の家での我慢や、やりきれない気持ちがあったことを伝えると、「私がおもつとひろし君の話を聴いてあげなければなりません。問題行動ばかりに目が向いて、彼の妹を思う優しい気持ちや切ない思いに気がつきませんでした。」との言葉が返ってきた。

お母さんも「いつも自分が大変だからとひろしに愚痴ばかりこぼしていたような気がします。考えてみたら、まだ2年生なんですね、彼は。彼の我慢に“ありがとう”を言わないといけなかったのに…」と、ひろし君に言葉のご褒美をあげたい気持ちでいっぱいになっていた。二人の心の中でひろし君は、「困ったひろし君」→「妹想いの優しいひろし君」に変わったのである。

その後、担任の先生からの連絡で、お母さ

ん、そして単身赴任しているお父さんも協力して、ひろし君を見守ってくれたおかげで、ひろし君の学校での問題行動はほとんど無くなったという。ひろし君の安心した笑顔が思い浮かんで、嬉しくなった。

〈本来の持ち味を見つめ直して!〉

最近、LD、ADHD、広汎性発達障害等の軽度発達障害に対しての支援が広まり、先生方の認識も深まっているようである。ADHDでは?LDでは?アスペルガー症候群では?と心配なさって来院・相談してくる保護者、先生は日増しに増えている。子ども臨床をする者にとって発達障害への関心・理解が高まることはうれしいことであるが、障害名やそれに伴う問題行動にとらわれて、その子自身の育ち、本来の持ち味に目がいかなくなっていくことを危惧することも増えてきた。

「さっちゃんさっちゃん」であり「ひろし君はひろし君」である。発達障害がある子どもでも「さっちゃんさっちゃん、ひろし君はひろし君」であることに変わりはない。ちょっと心配があったり、理解されにくさをもっている子どもたちの問題行動をその子からのメッセージとして受け取り、その子を取りまく環境、その子本来の持ち味、育ちの速さを見つめ直していくことを忘れないでいただきたいと願っている。

※事例はプライバシー保護のため修正を加えています。

25年前に戻れたら！



PROFILE

伊藤 勢津子 (いとう せつこ)

宮城県生まれ。小、中、高の教職経験後、臨床心理士となる。県立こども医療福祉センター、山の手クリニック心理職を経て現在、長崎県立大学、国立佐世保高専、長崎労働局メンタルヘルス相談カウンセラー。

25年前へタイムトラベル！

25年前にタイムスリップできたら、皆さんは何をなさいますか？「えっ！まだ生まれていない？」そんな方もいらっしゃるでしょう。25年と言えば4分の1世紀、長い年月である。その間に、人には忘れられない心残りなことがあるでしょう。

25年前、私は大学を卒業し、宮城県南部の海辺の町の小学校へ新任教員として赴任した。元気いっぱいな3年生33名の担任となり、やんちゃな子どもたちと日々奮闘して汗まみれになっていた。けれど、私の教員生活は1年で小休止となり、翌年の3月に退職、4月にはドイツへ再勉強のために旅立った。未熟な教員というより未熟な人間だった25年前の自分を振り返ると、初めて受け持った子どもたちのことを思い出す。とりわけ、M君のことを……

ごめんね、M君

M君は、小柄で少し落ち着きがなく、授業中は新米教師だった私から、毎日のように「静かにしなさい、じっとしてなさい！」と注意されていた。上目使いに人を見る癖があり、注意した私をにらみ返しては、またしかられる、ということの繰り返し。

2学期末のクリスマス間近のある日、M君のお母さんが、泣きながら学校に電話をかけてきた。M君が大手玩具チェーン店で玩具を万引きしたとのこと。私はすぐにM君宅に家庭訪問をした。M君のお母さんはかなり取り乱して、「こんな子は家の子じゃない、出て行きなさい。」とM君をしかっていた。

M君は泣くこともなく、うな垂れていて、じっと我慢している様子であったが、私と目が合うと、どっと泣き出した。M君に「もうそんなことはしないでね。お母さんに心配かけちゃいけないよ。」という言葉掛けしか思い浮かばずに、M君の家を後にした。

その後、クラスの他の子どもの保護者からM君のお父さんは長距離トラックの運転手さんをしているため、家にいないことが多く、小さい弟や妹の育児に疲れているお母さんは、イライラがつのるとM君をたたいたり、怒鳴ったりしているとの情報を得た。そこで私は、放課後M君を呼んで話をした。しかし、私を見るM君の目には反抗心が表れていて、ほとんど何も話してくれなかった。「そんなに嫌ならもう帰っていいよ。」「いいかげんにしなさいよ。」と優しい言葉をかけることもなく、M君を家に帰した。

その後、M君は、家や友人宅からお金を盗んだり、盗んだお金でクラスメートに大盤振る舞いしてお菓子や玩具を買ったりと問題行動を起こし続けた。私はどうしてよいか分からずに、M君を呼んでは、彼のだんまりに困ってしまい、「いいかげんにしなさいよ、ほんとに困った子。」と彼をしかることしかできなかった。そうして3月になった。

離任式が終わって、駅に向かう私の車の後を追いかけてきた子どもがいた。ほかならぬM君であった。彼のために何もできなかった私を、目にいっぱい涙をためて追いかけてきたM君。私は彼に手を振って「さよなら」を言った。

25年前の私に戻れたら、M君をギュッと抱きしめたい！

M君が欲しかったものは？

子どもたちと話をする場合、特に非行傾向の問題行動を起こした子どもたちに向き合うときは、彼らが安心して話ができるような雰

囲気を作ることが一番大切である。また、問題行動にとらわれず、その子自身に向き合うことなしに、心の交流は生み出せない。

盗みをした子どもの欲しかったものは、盗んだ「もの」でもなく「お金」でもない。本当に欲しかったものは、自分をしっかりと包み込んでくれる「愛情」なのだと思う。25年前にM君が欲しかったものは、「自分が愛され、守られているような実感」だったのではないだろうか。当時の私には、M君が安心して話ができる雰囲気も作れず、彼が本当に望んでいるものが何なのかと想いを巡らすこともせずに、「自分はダメな子」と彼自身に思わせるような言葉ばかり発していたのである。

M君からももらったお守り

教師を辞めるとき、私はクラスの子もたち一人一人に手紙を書いた。M君に書いた手紙の内容はよく思い出せないが、「いつまでも君を忘れないよ」と書いたことだけは覚えている。彼の気持ちに寄り添うことはできなかったが、「いつまでも忘れない」という約束だけは守っている。

子ども臨床は、私にとって子どもたちの心の中へのファンタジートリップである。子どもたちの話を聴いたり、一緒に遊んでいると、私の心は、すっかり忘れていた子どもの頃の感覚を思い出したり、その感覚のみずみずしさに驚かされたりする。けれども時々、未熟でごう慢な大人の私が顔を出し、子どもたちに安心感を与えることができなくなったりすることもある。そんな時、私は、私を追いかけてきたM君の姿を思い出す。

25年前の未熟な教師だった私の苦い経験は、今は、臨床家としての私の大切なお守りとなっている。もし、まだ教師を続けていたとしても、このお守りの意味は変わらなかっただろう。

未来をともに語ることを！



PROFILE

伊藤 勢津子 (いとう せつこ)
宮城県生まれ。小、中、高の教職経験後、
臨床心理士となる。
県立こども医療福祉センター、山の手ク
リニック心理職を経て現在、長崎県立大
学、国立佐世保高専、長崎労働局メンタ
ルヘルス相談カウンセラー。

大人になりたくない！

中学1年生の夢子ちゃん(仮称)は、小学6年生のころから不登校気味で、中学1年生の現在は、ほとんど学校へ行けなくなり、昼夜逆転の生活が続いている。昼過ぎに起きて、部屋にこもってCDを聴いたり、漫画を読んだりしている夢子ちゃんの姿を見て、「このままではひきこもりになってしまうのでは？」と心配したお母さんに連れられて来院した。

お母さんは来室するなり、自分も夫も会社で一生懸命働き、一人娘の夢子ちゃんの将来のためにいろいろと考えているのに、夢子ちゃんの「やる気の無さ」にがっかりし、嫌気がさしていると話し、こんなに尽くしてやっているのに、何が嫌で学校に行かないのか…と涙ぐんだ。

夢子ちゃんは、だるそうな表情で、「何となく学校に行きたくない。」と話し始めた。小学6年生のころ、友人関係がうまくいかず、悩んだことがあり、学校を休みがちになった。中学1年生からは、特に何も嫌なこともなく、勉強もできない訳じゃない。でも、「学校に行って、高校に行って、大学に行って、仕事に就いて、何かいいことがあるんですか？私は大人になんかなりたくないんです！」と、それまでの話し方とは違うびっくりするくらいはっきりとした口調で私に訴えた。私はすぐに返す言葉を見つけられず、「うーん……」とうなってしまう。

大人は楽しくない！

夢子ちゃんと、彼女が好きな歌手の最近の曲についておしゃべりし、最近、体を動かし

ていないから、運動したいという彼女の希望で、卓球をしたりしているうちに夢子ちゃんの表情も明るくなっていった。

「お父さんもお母さんも、いつも自分たちは頑張っているって言うんです。だから私も勉強頑張らせて。でもね、お父さんもお母さんもちっとも楽しそうじゃない！お母さんは職場での人間関係が嫌でいつも愚痴を言うし、お父さんも仕事がつくて嫌だって言う。頑張っても楽しそうじゃないもん！」と夢子ちゃんは少し挑戦的な目を私に向けた。私は暫く、沈黙を続けた。案の定、夢子ちゃんは私に「先生は大人になって楽しいですか？」と質問してきた。

私は「夢子ちゃんはどう思う？」と反対に彼女に聞いてみた。「わからないけど、何だか楽しそうに見える。」とはにかんだ笑顔で答えてくれた。

別室で待っていたお母さんに、私はある質問をした。お母さんの答えは「それは夢子が生まれたときです。」であった。

私の質問とは？そう、「これまでの人生で一番うれしかったのはどんな時ですか？」であった。

お母さんの学生時代、お父さんとのなれそめ、仕事のことetc.を話しているうちに、お母さんの表情も何だか楽しそうになっていき、「こんなことしゃべったのは久しぶりです。家事や仕事で忙しくてイライラしてばかりだったから。私の表情は暗かったのでしょうか。夢子も、大人にというより私にがっかりだったのでしょうか。」と苦笑いした。

私と話したことを夢子ちゃんにも話してみてくださいとお願いして2週間後、夢子ちゃんは両親と来院した。夢子ちゃんは「今日は

お父さんまで来ちゃった。」と恥ずかしそうに、でもうれしそうに言った。夢子ちゃんの中で何か確実に変化したことを直感した。

「お母さんはね、お父さんののんびりしたところが好きで結婚したんだって。お母さんの仕事もね、結構倍率高くて大変だったらしいけど、なりたかった職業だから頑張ったんだって。疲れるけどやりがいがあるからずっと続けたって。お父さんもね、お母さんのきはきしたところが気に入ったらしいよ。私はお父さん似かなあ……」と語り、「将来の夢は？」という私の質問に、「私はね、動物が好きだから獣医さんになりたいな！勉強しなないとね！と目をきらきらさせて答えた。そんな夢子ちゃんの目をみつめながら、私は彼ら親子が話した会話を想像してうれしくなった。

子どもも大人も未来への旅人！

子どもと向き合っていると、その未来の長さに嫉妬してしまうことがある。子どもはいつも未来志向である。人生の先輩である私たち大人も、もちろん未来へ向かって命の旅を続けている。子どもにとって、未来を想像するためのモデルである私たち大人が人生に楽しみを見出せなくなったり、「夢」を語らなくなったら、子どもたちは「夢」を語るだろうか？

私が教師という仕事にあこがれていたころ、その仕事以上にあこがれていた言葉がある。

「教育とは未来をともに語る」というルイ・アラゴンの詩の中の言葉である。私は子どもたちとずっと「未来をともに語る」大人でありたいと思う。それが、もしかしたら私が思う「心の教育」なのかもしれない。